

2020年4月19日

新しい相互の交わり

復活節第2主日を迎えました。先週、教皇フランシスコはパンデミックに圧迫を受け続けるローマと全世界に向けて復活祭のメッセージと祝福をおくられました。

「今日、わたしの思いは、新型コロナウイルスの被害を直接受けている人々、とりわけ感染症の患者、亡くなられた方、最愛の人の死を悼《いた》んでいる方に向かいます。なかには最期の別れすら告げられなかった人もいます。いのちの主が、亡くなられた方をみ国に迎え入れてくださいますように。また、今も苦境にある人、とくに高齢者と孤独な人にいやしと希望を与えてくださいますように。介護施設で働く人や、一時収容施設や拘置所にいる人といった、とりわけ感染リスクにさらされている人に対する、主の慰めと、必要な助けが欠けることがありませんように」 (<https://www.cbcj.catholic.jp/2020/04/15/20660/>)。

教皇さまは、いつもわたしたちが復活したキリストに心を開き、最も貧しい人々や難民、移民の方々、社会的弱者へのまなざしを忘れることがないようにと呼びかけを続けてこられました。それはわたしたちが、どんな時も心の目を開いて、この世界の現実を〈いのちへのまなざし〉で捉えることを忘れないようにという促しにもなっています。

今日の福音（ヨハネ20・19-31）の中で、弟子たちは「ユダヤ人たちを恐れ、自分たちのいる家の戸に鍵をかけて」いました（ヨハネ20・19）。弟子たちの心を満たしていたのは「恐れ」でした。しかしその恐れに囚われた弟子たちの真ん中にイエスさまは現れ「あなたがたに平和があるように」（ヨハネ20・19、26）と繰り返し弟子たちを諭《さと》し「恐れるな」と大きな安らぎをもたらします。今日のわたしたちも、自分や家族、友人が感染者となる恐れを心に抱き、さまざま日常生活の制約を受けながら、家の中に留まっています。そのようなわたしたちのところにも復活したイエスさまが訪れてくださることに心を開いていきたいと思います。

第1朗読の使徒言行録（2・42-47）の中では、初代教会の人々が大切にされたことが記されていました。

「〔信者たちは、〕使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。すべての人に恐れが生じた」 (2・42)

ソーシャル・ディスタンス (社会的距離) を守って生活するわたしたちにとって、新しい創造的な「相互の交わり」を考えることが、何よりも重要な時を迎えているように思われてなりません。

最近、教会の近くの立川通りからモノレール沿線に抜ける道で、小さな変化を感じています。以前は、信号のない十字路で歩行者が数名待っていても停車する車は少なかったように覚えています。現在は車がよく停車してくれるようになったという印象があります。ラジオの放送でも〈人の優しさ〉を感じるようになったという声を耳にします。急いで目的地に到達することも必要な時があるかもしれませんが、今、本当に大切なことは何か、わたしたちは立ち止まって考えるように問われているに違いありません。

「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。」 (マタイ16・26)。

新しい相互の交わりを創出し、隣人の心に橋を架けながら、この1週間を過ごしてまいりましょう。

カトリック立川教会 主任司祭
東京教区 ヨゼフ 門間 直輝